

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	府中保育園
期間	令和 6 年 6月～ 2月

1. 活動のテーマ

<テーマ>

本園1歳児：いろをしってみよう

<テーマの設定理由>

子どもたちとの会話の中で「これはあか」「こっちはなに？」など色への興味の始まりを感じる言葉が聞かれ始める。また、色水の変化に興味津々で見ている。

2. 活動スケジュール

・夏の期間を利用し、色水を始めとした色にちなんだ遊びや活動について考え、保育に導入していくこととする。（色水、はじき絵、色水、寒天、写し絵、小麦粉粘土など）

- ・色を使った様々な製作を楽しむ。
- ・遊びを通して色の名前を伝え、色という存在を知り、その名前を知り、覚えたり好きな色を使って、より豊かに活動に取り組めるようにする。
- ・遊んでいくうちに、色が変化する事も知る。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・紙(画用紙、模造紙、障子紙など)、クレヨン、マーカーペン、絵の具、食紅、小麦粉、片栗粉、カラーセロハン、石鹼、寒天の素、エアパッキン、様々な容器、その他

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・色水遊びは水→食紅で色水へ変化→ペットボトルやバケツに入れて楽しみ、その中で混ぜ合わせると色が変わる事に気付くなど段階を設けて取り組む。最初は1色から始め、徐々に2色3色と増やし、色の変化や光に当ててみた変化を楽しむ。また入れる容器の色によっても、色が変化して見える事にも気づく様子が子どもたちの中に見られた。

・色の認識は個人差があり、高月齢児は具体的に色を述べる事が出来るようになってくる。また低月齢児にも色には名前があることが分かり、オウム返しをして発音を楽しんでいた。

・普段の製作や手指活動などで色を選択し楽しむ活動を行う事で、自分で選べる楽しさや混ぜる事で生じる変化に興味や驚きの様子が見られた。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

○色水遊び中、透明や水色、そして赤い容器に青の食紅で色づいた水を移し変えていくうちに、赤い容器に入れた際の色の見え方に疑問を持ったようで「…なんか黒いねえ」と一言。



○赤、青、黄色の食紅で色付けした水を2つ選んで、色を混ぜてみると、全然違う色に変化し、笑顔から驚き真顔になり、しばらく見つめていた。



○絵の具を7色用意し、エアパッキンの上に自由に色を塗る。「赤にする」「次みどり」など、好きに色を選べるのを楽しみながら、やがて色が混ざると変化する事に気付くと、そこを重点的に筆を走らせ変化を楽しんでいた。



○赤、青、黄色の食紅で色付けした小麦粉粘土を最初は1色ごとで遊ぶ。形作って楽しんだのち、飽きてきたところに3色で提供すると、再び興味が沸いて重ねたり、こねて混ぜるなど遊びが継続出来た。「これおにぎり」「これいちご」と色や形でイメージ出来たものを作って楽しむ事が出来た。



○模造紙の上に絵の具を垂らし、その上からエアパッキンで覆う。その上から子どもたちが手や足で踏んでみると色が広がる。広がったり混ざったりする様子を「うわぁ」と驚きと楽しみの声上がり、何度も踏みつけて色が広がる様子を楽しんでいた。



5. クラスで話し合い、良かったこと、次につなげたいこと、課題

・最初は製作等に抵抗感があった子も経験を重ねていくうちに楽しさを覚え、期待を持って活動に参加し、集中する子が増えていった。
・徐々に色の理解が進み、興味関心が増え、遊びの中でも「○色」と答えるなど楽しむ高月齢児の姿を見て、中低月齢児も真似して言う事が増えた。
・上手く言葉で表現できない年齢でも、違いや変化に気付いた反応が見られ、驚いた表情や「あー」と保育者と目を合わせ笑顔で共有する経験が出来、子どもの刺激に繋がった実感が得られた。

・似たような色の提供が多かったの、自ら選んで色づくりする等もっと目で見て楽しめる活動があると良かった。
・子どもの素敵な気付きや言葉、発見の表情などを記録として残すタイミングが難しかった。

・さらに発展させながら遊び込めるよう定期的に保育に取り入れていく。また「どんな色が好き？」のペープサートを皆で作って、演じる事も楽しんでいく。

6. 次の活動

<活動内容、新たに準備した素材・設定等>

- ・クレヨンと各色にちなんだイラストの載った塗り絵。クレヨン、絵の具等。
- 一人1色12人いるので12色を用意し、色を選んでその色のクレヨンで塗り絵、上手く塗れていない部分は絵の具で色付けする。
- 保育者で切り、クレヨンは持ち手を付けてペープサートに。イラストはスケッチブックに貼り付け、自分が手掛けたことが分かるように写真も付ける。

<活動中の子どもの姿等>

*カリキュラムにて新しい取り組みとしてムーンサンド作りを行ったり、絵の具は机で塗るやり方が良いなどのアドバイスをもとに、取り組んだ。

○色塗り作業を行っていた時は1色しか使えない事に疑問を持っていたが、出来上がったスケッチブックシアター作品を見せると、一人ひとりのページを見て、高月齢児はこの色はだれが塗っていたかを覚えていたようで「○○ちゃん」と答えたり、出てきた自分や友だちの写真が見えると嬉しそうに答えていた。

○低中月齢児は周りの色を見比べる様子が見られ、高月齢児は自分の知っている色を自信を持って大きな声で答える姿が見られた。

○ペープサートは自分の塗ったクレヨンのイラストを持ち、歌に合わせて立ち上がったりみんなで顔を見合わせながら笑顔で楽しんでいた。色の名前がまだ言えない子も保育者の声掛けにオウム返しをして楽しんでいた。



7. 振り返り

<本活動によって得た保育者の気づき>

- ・色への認識は個人差があり、様々な色への認識が出来始めていた年齢は満2歳半の子どもたちで、色と名前が一致し始める様子が見られていた。
- ・1歳児は発達の個人差が大きくある年齢の為、今回の取り組みは高月齢児向けの内容だったと感じた。しかし、これをきっかけに全員が『色』と言う存在を知ることが出来た取り組みでもあった。
- ・様々な色を使った遊びは子どもたちの中での日々の保育の楽しい時間となり、自ら手掛けたものを使って、自らが演じる活動をする事で、みんなに注目される機会を経験することが出来、自信を持った嬉しそうな表情を見せる姿へと成長が感じられた。
- ・手軽に導入できる色を使った遊びを通して、今後も様々な体験をする事で子どもたちの感性を伸ばす活動として活用していきたいと考える。そして年齢を重ねていくにつれ、混色を楽しみながら実験を行い、好きな色を見つけたり、イメージを創造したりしながら幼児期の自発的な造形表現や遊びを引き出していける活動が色についてのすくわくの取り組みの今後の目標と感じた。